

愛媛県松山市睦月島方言における重起伏調アクセント

久保 博雅

1 はじめに

睦月島は愛媛県松山市北西に位置し、忽那諸島と呼ばれる島嶼群に属している。平成 27 年度国勢調査によると人口は 222 人であり、そのうち 85%以上が 65 歳以上の高齢者である。武智（1957）は愛媛県の方言区画を①東中予方言、②南予方言¹、③瀬戸内海島嶼方言の 3 つに区画しており、睦月島方言はこのうち瀬戸内海島嶼方言に属する。武智によれば瀬戸内海島嶼方言は「四国本土沿いの二三の島を除いた島々の方言、中国方言（山陽方言）と同一系統」であり、「方言アクセントは殆ど中国方言と同じ」と述べている。また愛媛県内のアクセントの類型と分布をまとめた清水（2010）では、睦月島は「いわゆる東京式の体系」に分類しており、愛媛県内では睦月島の他に、野忽那島を除く忽那諸島各島（中島、怒和島、二神島、津和地島）、安居島（旧北条市）、伯方島、大三島（今治市）、上島町（一部の島嶼部を除く）、青島（大洲市）、宇和島市、愛南町を東京式に分類している。

この睦月島には、周辺の島嶼部では確認されない特徴的な音調がある²。それは「重起伏調」と呼ばれるもので、単語もしくは句の中でピッチの高まりが 2 か所に現れるというものである。本稿ではこの重起伏調の音調を主軸に、睦月島のアクセントの特徴について記述していく。

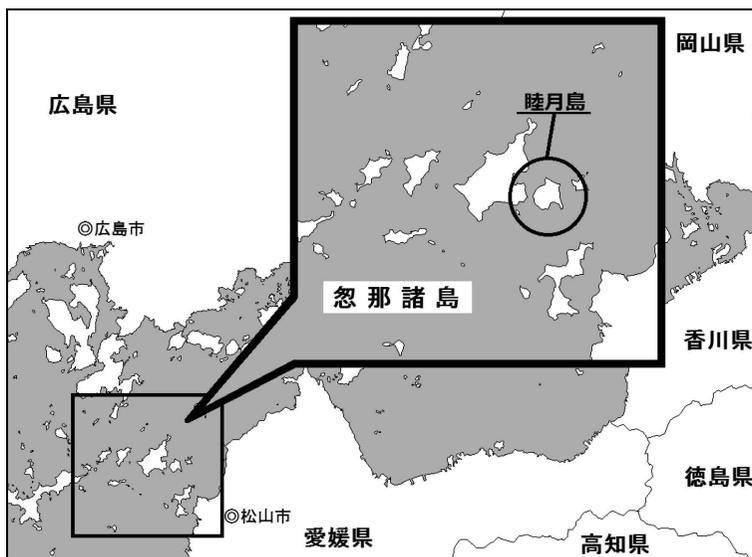


図 1 睦月島の位置関係

¹ 南予方言は更に大洲方言と宇和方言に分けることができ、宇和方言の中に渭南方言（愛媛、高知両県にまたがる四国西南部の地方）を分けることができる。

² 正確には睦月島の西側に浮かぶ中島でも時々聴かれるが、睦月島の方が高頻度で出現する。

2 先行研究

睦月島方言アクセントについてまとめた先行研究としては清水・田中（2005）が挙げられる。当該研究は睦月島方言アクセントの音調の特徴とアクセント型の所属語彙について報告したものである。まず、睦月島のアクセント体系については以下のように示している。’の記号はピッチの下がり目を表している（清水・田中の記号を使用）。

／日	カゼ	サカナ	ニワトリ	0型	
	火’	フ’ネ	ウ’シロ	セ’ロハン	1型
		オト’	アサ’ヒ	コガ’タナ	2型
			オトコ’	オーア’メ	3型
				トシヨリ’／	4型

この体系を見ると、睦月島方言アクセントは式の対立が無い $n+1$ 型のアクセントであることが分かる。続いて類別体系については以下のようにまとめており、いわゆる東京アクセントの中輪式であるとしている。3拍名詞第7類は清水・田中が意図的に表から外している（後述）。

- 1拍名詞：1・2類（0型）／3類（1型）か？
- 2拍名詞：1類（0型）／2・3・5y類（2型）／4・5x類（1型）
- 3拍名詞：1・6類（0型）／2・4類（3型）／5類（2型）
- 2拍動詞（終止形）：1類（0型）／2・3類（1型）
- 3拍動詞（終止形）：1類（0型）／2・3類（2型）
- 3拍形容詞（終止形）：（2型）＝一型

2拍名詞第5類については、語によって二つの型に分かれるとして、便宜上1型のものをx類、2型のものをy類と下位分類している。このx類、y類について、所属語彙を以下のように示している。

- 5x類（1型）…雨、汗、兄、虻、鮎、桶、牡蛎、陰、蜘蛛、鯉、足袋、常、鶴、鍋、鱧、鮎、前、窓、婿、腿
- 5y類（2型）…藍、青、赤、朝、井戸、黒、白、縦

なお、このほか「蛭」「蛇」の2項目が0型をとるが、周辺地域と同じ型であるとし、地域的な例外として、類別体系には含んでいない。

同類内で複数の型に分かれるものとして、3拍名詞第7類についても言及している。ここでは0型、1型、2型、3型の4つに分かれるとしており、周辺地域にも共通するものだと述べている。所属語彙は以下の通りである。

- 0型…苺、葉、卵
- 1型…後ろ、鯨
- 2型…兜、辛子、椿、一つ、一人、緑

3 型…便り、病い

第7類とは異なり、周辺地域において「確認される傾向ではあるが、必ずしも各地点共通したものではない」と述べているのが3拍名詞第4類である。第4類に所属する語は3型が多い中、「鏡」「白髪」「硯」「鯰」「鉄」「襖」は2型をとるとしている。

また、音調型については重起伏調が顕著に出る方言だとして、以下のa、bの例を挙げている。なお、[は音調の大幅な上昇、%は音調の中幅な上昇、’は音調の下降を示しており、Hは相対的に高い拍、Mは相対的に中程度の拍、Lは相対的に低い拍、BはLより更に低い拍を示している。

- a) %ハ’シガヌレ [ル=MLLLH (端が濡れる)
cf. [ハ’シガヌレ [ル=HLLLLH (箸が濡れる)
- b) %ハ’ナガア [カ’イ=MLLLHL (鼻が赤い)
cf. ハ [ナ’ガアカ’イ=LHLLLB (花が赤い)

清水・田中(2005)では単語単独における重起伏調の例は挙げていないが、後の清水(2010)では単語単独における重起伏調の例として「魚」を以下のように挙げている(音調の記号は清水・田中(2005)に揃える)。

%サ’カ [ナ=MLH (魚)

清水・田中によれば、重起伏調の句頭の高さは「あくまでも中程度」であり、核の実現によって現れる頭高の音調とは区別される。すなわち、上記のaについては、「端」と「箸」ではどちらも相対的には1拍目が高く2拍目が低い音程で実現するが、「端」の1拍目は中程度の高さであり、「箸」の1拍目の音程とは区別されるものであると述べている。

以上のように、清水・田中の研究では2拍名詞第5類、3拍名詞第4類、第7類が複数の型に分かれる類であることを指摘している。しかし、2拍名詞第5類はx類、y類と下位分類を設けたのに対し3拍名詞第4類は2型の語がある程度語数がありながらも類別体系では3型に分類している点は明確な説明がなされておらず疑問が残る。また重起伏調については、詳しい分析はなされず大まかな指摘に留まっている。そのため、どのような音調型が存在するのか、重起伏調の出現にはどのような規則があるのかなどの記述が不十分であると言える。本稿では筆者による調査データを基に、睦月島における重起伏調の出現の規則性について言及するとともに、類別体系も新たに示していきたい。

3 データ

本研究のインフォーマントは以下の5名で、いずれも睦月島の生まれである。本研究では第1回調査を2013年8月に、第2回調査を2014年8月に行っている。

- 話者A 1925年生まれ。女性。 話者B 1941年生まれ。男性。
話者C 1945年生まれ。女性。 話者D 1944年生まれ。女性。
話者E 1939年生まれ。女性。

調査語彙は1拍から6拍の名詞、3拍、4拍の動詞である。調査方法は読み上げ式を採用している。なお、第2回調査は補助的な調査であったため、第1回調査より調査語彙が少なく、調査時間の都合上話者C、話者D、話者Eは1拍、2拍、4拍の名詞の調査ができていない。

4 調査結果

ここでは、基本的な重起伏調の現れ方について整理をするために、まずは文単位ではなく単語単独での重起伏調について分析を行う。ただし本稿では、中程度の音程(M)は設定せず、相対的に高い(H)か低い(L)の二段階のみとしている³。

4.1 単語単位での重起伏調の実現規則

調査の結果、睦月島の重起伏調には以下のような音調型があることが分かった。

3拍語	クルマ(車) = HLH	キエル(消える) = HLH
4拍語	アメダマ(飴玉) = HLLH	ウマレル(生まれる) = HLLH
	フリソデ(振袖) = HLHL	ヨロコブ(喜ぶ) = HLHL
5拍語	タマゴイロ(卵色) = HLLLH	
	ヤキザカナ(焼き魚) = HLHLL	
	オモチャバコ(おもちゃ箱) = HLLHL	
6拍語	カンガエゴト(考え事) = HLLLLH	
	アオダイショウ(青大将) = HLHLLL	
	クワズギライ(食わず嫌い) = HLLHLL	
	ネコナデゴエ(猫なで声) = HLLLHL	

また、上記のように語頭1拍と語末までのもう1拍が高く現れるのが基本であるが、以下のように語中に撥音が存在する単語では、その音節全体が高く現れる場合がある。

ユウ <u>ビ</u> ン(郵便) = HLHH	カツ <u>ド</u> ン(カツ丼) = HLHH
ウン <u>テ</u> ンシユ(運転手) = HLHHL	ケイ <u>サ</u> ンキ(計算機) = HLHHL
オン <u>ナ</u> ゴコロ(女心) = HHLHLL	

ところで今回の調査では、話者によって重起伏調の出現に明確な個人差が見られた。5名の話者のうち、話者B、話者C、話者Dは高頻度で重起伏調が出現するのに対し、話者A、話者Eはほとんど重起伏調が出現しない。次の表1は、各話者の拍数、品詞ごとの調査語数とそのうち重起伏調で出現した語数をまとめたものである。これを見ると、話者Aと話者Eは他の3名に比べて重起伏調の出現が非常に少ないことが分かる。話者Aはかろうじて数語、重起伏調で発音しているが、話者Eに至っては一切重起伏調で発音していない。

³ 清水・田中は聴覚印象にもとづいて中程度の音程を認めているが、本稿の調査では筆者の聴覚印象で明確に中程度の音程だとは認められなかった。計量的な音響分析を行うことにより、中程度の音程と認められる可能性はあるが、本研究ではそれを行っていない。

表 1 各話者の重起伏調の出現程度

	話者 A	話者 B	話者 C	話者 D	話者 E
3 拍名詞	1/66	34/73	21/39	6/39	0/39
4 拍名詞	4/69	42/69	-	-	-
5 拍名詞	5/50	32/51	34/39	29/39	0/39
6 拍名詞	1/56	55/58	44/45	32/45	0/45
3 拍動詞	0/22	13/33	13/33	13/33	0/33
4 拍動詞	0/10	15/20	18/20	18/20	0/20

(重起伏調の出現数/調査語数)

この重起伏調が出る話者と出ない話者を比較することで、重起伏調の実現規則を見出すことができる。結論から述べると、重起伏調は、句頭に生じる下降を除くと 2 番目の下降の位置が重起伏調の出ない話者のアクセントの位置と概ね一致する。以下に対応を示す。

型	語例	話者 A、話者 E	話者 B、話者 C、話者 D
0 型	ツクエ (机)	HHH	HLH
	オモイデ (思い出)	LHHH	HLLH
	アリアワセ (有り合わせ)	HHHHH/LHHHH	HLLLH
	ハンタイガワ (反対側)	HHHHHH/LHHHHH	HLLLLH
	ウタウ (歌う)	LHH	HLH
	アツマル (集まる)	LHHH	HLLH
3 型	オリガミ (折り紙)	LHHL	HLHL
	アカトンボ (赤蜻蛉)	LHHLL	HLHLL
	ノミトモダチ (飲み友達)	LHHLLL	HLHLLL
	ワカレル (別れる)	LHHL	HLHL
4 型	ケイサツショ (警察署)	HHHHL/LHHHL	HLLHL
	ムカシバナシ (昔話)	LHHHLL	HLLHLL
5 型	アサメシマエ (朝飯前)	LHHHHL	HLLLHL

次に、型ごとにこの対応どの程度一致しているかを示す。重起伏調が出現しない話者 A と話者 E のアクセントを比較し一致しているものを睦月島標準アクセントとみなす⁴。その睦月島標準アクセントと、話者 B、話者 C、話者 D の重起伏調アクセントをそれぞれ比較し、先に述べた対応の成立の割合を求めた。その結果を型ごとにまとめたものが以下の表 2 になる。括弧内の数字が「睦月島標準アクセントと対応した語数/重起伏調で発音された語数」を表している。なお、標準語アクセントと同様に、睦月島においても 0 型の語と語末に核を有する語 (3 拍名詞 3 型、4 拍名詞 4 型など) は単語単独では区別ができないため、この表では便宜上 0 型にまとめている。

⁴ 話者 A と話者 E の間にも異なるアクセントの語はあるが、比較的少数である。話者 A と話者 E のどちらか一方しか調査していない語もあるが、それは調査している話者のアクセントを標準アクセントとみなした。

表2 重起伏調の対応の割合

		話者 B	話者 C	話者 D
3 拍名詞	0 型	91.2% (31/34)	76.2% (16/21)	83.3% (5/6)
4 拍名詞	0 型	71.4% (20/28)	-	-
	3 型	56.3% (9/16)	-	-
5 拍名詞	0 型	75.0% (6/8)	100.0% (6/6)	100.0% (5/5)
	3 型	93.3% (14/15)	100.0% (17/17)	100.0% (13/13)
	4 型	100.0% (6/6)	100.0% (6/6)	100.0% (6/6)
6 拍名詞	0 型	100.0% (4/4)	100.0% (4/4)	100.0% (4/4)
	3 型	50.0% (1/2)	100.0% (1/1)	100.0% (2/2)
	4 型	100.0% (45/45)	97.1% (34/35)	100.0% (25/25)
	5 型	100.0% (2/2)	100.0% (2/2)	100.0% (2/2)
3 拍動詞	0 型	92.3% (12/13)	92.3% (12/13)	92.3% (12/13)
4 拍動詞	0 型	85.7% (6/7)	100.0% (8/8)	100.0% (8/8)
	3 型	75.0% (6/8)	80.0% (8/10)	80.0% (8/10)

この表を見ると、対応には項目差、個人差はあるが、概ね対応していることが分かる。したがって、重起伏調は句頭に生じる下降を除くと2番目の下降の位置が睦月島標準アクセントと概ね一致することが言え、また重起伏調の有無に関わらずアクセント核は下げ核であることが言える。

4. 2 文単位の重起伏調

ここまで単語単位での重起伏調について見てきた。次に助詞が付き文となった場合では重起伏調がどのように現れるのかを確認する。先にも述べたように睦月島方言のアクセントは標準語と同様に、0型と語末に核を有する語（3拍名詞3型、4拍名詞4型など）が単語単独では区別ができない。標準語アクセントでは、0型は助詞まで同じ高さで発音されるのに対し、語末に核を有する語は助詞が低く付く。それを踏まえて、重起伏調を持つ睦月島の場合どのように現れるのかを確認する。

0型 アブラ（油）＝HLH アブラガナイ（油がない）＝HLLL HL

ダイダイイロ（橙色）＝HLLLLH ダイダイイロニソマル（橙色に染まる）＝HLLLLL HLH

3型 カタナ（刀）＝HLH カタナガナイ（刀がない）＝HLHL HL

4型 コンニャク（蒟蒻）＝HLLH コンニャクオタベル（蒟蒻を食べる）＝HLLHL LHL

上記のように、3拍名詞3型や4拍名詞4型など語末に核を有する語は、語単独の重起伏の形を変えないままに助詞が低く付き用言（動詞・形容詞）が後続する。その一方で、0型は単語末での上昇が起こらず、後続の用言部分で再び上昇する。この上昇位置については用言が有核であれば（上の例では「ない」が1型、「食べる」が2型）、アクセント核（下降）を実現するために核のある拍が上昇するものと考えられるが、後続の用言が無核の場合、上の「橙色に染まる」のように、その用言で重起伏調が出現する場合がある。後続の無核語の重起伏調については次の例も確認された。

スズリオアラウ（硯を洗う）＝LHLL HLH

フスマオアケル（襖を開ける）＝LHLL HLH

やはり後続の用言が無核語の場合、用言部分で重起伏調が出現する傾向がある。しかし本調査では、用言部分に重起伏調が出現するのはそこに焦点があるためなのか、そうでなくても重起伏調が出現するののかといった点について十分に調査ができていないため、ここでは例を示すに留めておく。

なお、語中に核を有する語（4拍名詞3型、5拍名詞3型など）については、語末に核を有する語と同様に、語単独の重起伏調の形を変えないままに動詞が後続する。以下に例を示す。

4拍名詞3型 フリソデオキル（振袖を着る）＝HLHLL LH

5拍名詞3型 ヤキザカナオツクル（焼き魚を作る）＝HLHLLL LHL

5 睦月島アクセントの類別体系

4節で述べたように、重起伏調を伴う単語は、重起伏調を伴わないものと対応することが分かった。したがって睦月島の重起伏調は2つ目の下降の位置で型を判別することができる。これを踏まえて、睦月島アクセントの名詞の類別体系について、筆者の調査データを基に検討する。先に、清水・田中（2005）で述べられていた類の中で複数の型を持つ2拍名詞第5類、3拍名詞第4類、3拍名詞第7類について述べておきたい。筆者の調査においても、やはり先行研究と同様に両者とも複数の型が現れた。結果は以下の通りである。

(1) 2拍名詞第5類

1型…藍、秋、蜘蛛、声、琴、猿、足袋、鶴、鍋、鱧、窓

2型…青、赤、朝、井戸、白

0型…蛭、蛇

(2) 3拍名詞第4類

2型…鏡、昨日、白髪、硯、鉢

3型…男、刀、縫い目、袋

2～3型…鯰、襖

(3) 3拍名詞第7類

1型…蚕、後ろ、鯨、兜、病

2型…苺、葉、辛子、椿、緑、ひとつ

3型…便り

1～2型…卵

2拍名詞第5類については、清水・田中と同様に1型と2型の2つの型が現れると同時に、地域的な例外語とされる「蛭」「蛇」が0型で確認された。この2項目について、筆者の過去の調査では忽那諸島各地で0型が確認されるため、確かに地域的例外として認めてよいものと考えられる⁵。また、清水・田中との相違点として、「藍」が1型で確認された。

⁵ 2013年に筆者が実施した忽那諸島全集落を対象にしたアクセント調査。各集落2名ずつ調査をした。

3拍名詞第4類については、2型と3型が確認された。2型の所属語彙は概ね清水・田中の調査に一致する。これを変化の途上と捉えるか、2拍名詞第5類と同様に2つの型が存在すると捉えるのか、結論を述べるには現時点ではデータ不足である。しかし、清水・田中の調査の話者（大正9年生、大正11年生）と結果が一致しているということを考慮し、一旦2拍名詞第5類と同様に2つの型が存在しているものとみなし、2型を4x類、3型を4y類と下位分類しておきたい。

0型、1型、2型、3型に分かれるとされていた3拍名詞第7類については、0型が確認されず1型、2型、3型に分けられた。0型に分類されていた「苺」「菓」は2型で現れ、「卵」は話者によって1型と2型で異なりを見せた。2拍名詞第5類や3拍名詞第4類と異なり、清水・田中の調査とは異なる点も散見されるため、これについては変化の途上とみなす。

以上の点を踏まえた上で名詞の類別体系を示すと、以下のようになる。なお、第7類は変化の途上とみなし一旦は外しておく。

- 1拍名詞：1類（0型）／2類・3類（1型）
- 2拍名詞：1類（0型）／2・3・5y類（2型）／4・5x類（1型）
- 3拍名詞：1・6類（0型）／4y類（3型）／2類・4x類・5類（2型）

先行研究との大きな異なりは1拍名詞第2類にある。清水・田中（2005）では第2類は0型をとり、その結果東京内輪式に分類していた。しかしながら今回の調査では第2類は1型が認められたため、東京内輪式に分類されることとなる。確かに、重起伏調アクセント地域であることから2類語の有核化は重起伏調によるものと考えられることもできるが、重起伏調が出にくい話者Aが第1類で0型と1型で揺れていたのに対し、第2類では安定して1型を発音していたことから、第2類は1型に移行したものと考えられる。

また、3拍名詞においても第2類が3型であったものが2型に変化しているという点も押さえておくべき点だろう。

6 周辺地域の重起伏調について

平山編（1998）では広島県安芸郡坂町と江田島町秋月のアクセントの特徴について「元来低起式である語詞の語頭の第1拍が高く発音され、次いで同じ文節の中にもう一度高く発音される拍があるという特徴的なアクセント形が認められる」と述べている。これは本稿で述べている重起伏調に該当するが、平山編では「擡頭アクセント」と呼んでいる。ここでは坂町・秋月で発音される重起伏調と広島市などで発音されるアクセントを比較しており、次のように記述している。（●と○は名詞の拍、▷と◁は助詞を表し、●と▷は相対的に高い拍、○と▷は相対的に低い拍を表す。）

語例	広島市など	坂町・秋月
小豆、百足、男、ひばり	○○●▷	●●●▷
足跡、そばかす、コーヒー	○○●○▷	●●●○▷
桜、湯のみ	○○○▷	●○○▷

上記の対応を見ると、広島市などで有核の語は句頭と核を担う拍が高く発音され、無核の語は句頭と助詞が高く発音されることが分かる。この対応は睦月島における重起伏調の現れ方に一致する。

平山編では広島県で見られるこのような重起伏調の成立について、強調法によるものではないかと述べている。すなわち、当該地域では低起型のアクセントの語を音声による強調法をとるときに、頭高で発音するという例が見受け、それが重起伏調の成立に由来するのではないかとしている。

7 おわりに

本稿では以下の内容を明らかにしてきた。

- (1) 睦月島の重起伏調には個人差がある。また、重起伏調の出現規則として、句頭に生じる下降を除くと2番目の下降の位置が重起伏調の出ない話者のアクセントと概ね一致する。
- (2) 文単位の場合、単語のアクセントが0型の語は単語末での上昇が起こらず、文後半の述語用言部分で上昇するようになる。有核語の場合は核の位置で上昇するが、無核語の場合は述語用言部分で重起伏調を実現させる場合がある。
- (3) 1拍名詞第2類が有核化し、東京中輪式から東京内輪式に変化している。

本稿では睦月島の重起伏調について調査データを基に分析を行った。当該地域の重起伏調の存在自体は先行研究で報告されていたが、出現の規則を記述できたという点では意味のあるものになっただろう。6節でも述べた通り、同様の規則で重起伏調が出現する地域は周辺地域にも存在し、また重起伏調自体は全国各地に点在している。今回は広島県の例しか引用できなかったが、その他の重起伏調を持つ方言アクセントとの異同を検討することが今後必要となる。

また、十分に検討できなかった点として重起伏調の成立過程とその働きが挙げられる。成立の要因については広島県の例で仮説を引用したが、睦月島でも同様のことが言えるのか、そもそもその要因は適切か、検討しなければならない。また、4.2節で扱った文単位の重起伏調については、調査データが不十分であり詳しいことを述べるができなかった。今後、更なる調査を行い文単位における重起伏調の実現規則について、明確にしていきたい。

参考文献

- 清水誠治 (2010) 「愛媛にみるアクセント分布の多様性」『日本語研究の12章』明治書院
清水誠治・田中江扶 (2005) 「睦月島方言アクセントについて」『都大論究』42
武智正人 (1957) 『愛媛の方言—語法と語彙—』愛媛大学地域社会総合研究所
平山輝男編 (1998) 『日本のことばシリーズ34 広島県のことば』明治書院

付記 本稿は、日本方言研究会第99回研究発表会(2014年10月17日、於北海道大学)にて発表した内容に修正を加え、まとめ直したものである。発表に際し、貴重なご意見を賜った先生方に、記して感謝申し上げます。

(広島大学大学院博士課程後期2年)